

I

はじめに

第1章 計画策定にあたって

第1節 計画策定の趣旨

伊那市では、2019年（令和元年）に「第2次伊那市総合計画」を策定し、基本構想に掲げた将来像「未来を織りなす 創造と循環のまち 伊那市」の実現に向けて、まちづくりを進めてきました。

この間、国や地方を取り巻く社会情勢は、少子高齢化の進行や人口減少問題の顕在化、環境問題の深刻化、財政状況の悪化、産業・雇用構造の変化、高度情報化の進展など、刻一刻と変化してきました。さらに、新型コロナウイルス感染症の世界的な流行や急激な物価上昇など、私たちの暮らしを取り巻く環境も大きく変化してきています。

また、地方分権の進展により、地方自治体の自由度と責任が拡大されていく中で、地方創生の視点から本市のまちづくりを総合的かつ計画的に進めていくためには、市民や地域、事業者、各種団体など多様な主体の参加と協働による取組の重要性が今まで以上に高まっています。

こうした状況を踏まえ、第2次伊那市総合計画前期計画の成果を踏まえつつ、従来にはない変化や新たな課題に的確に対応し、継続的な発展に向けた総合的かつ計画的な行政運営の指針として、長期的な展望を示すために第2次伊那市総合計画後期計画を策定するものです。

第2節 計画の構成及び期間

今回策定する「伊那市総合計画」は、「基本構想」「基本計画」「土地利用計画」及び「実施計画」をもって構成し、それぞれの性格と目標年次及び期間を次のように定めます。

1 基本構想

基本構想は、長期展望に立って本市の将来像を定め、それを実現するための施策の大綱を示すものです。2019年度（令和元年度）を初年度とし、2028年度（令和10年度）を目標年度とします。

2 基本計画

基本計画は、基本構想で定めた施策の大綱を実現するため、実効性の高い計画となるよう、適切な指標や数値目標を設定した上で、基本的施策の内容を定めるものです。

基本構想の前半5年間である「2019年度（令和元年度）から2023年度（令和5年度）まで」を前期基本計画期間とし、後半5年間である「2024年度（令和6年度）から2028年度（令和10年度）まで」を後期基本計画期間とします。

3 土地利用計画

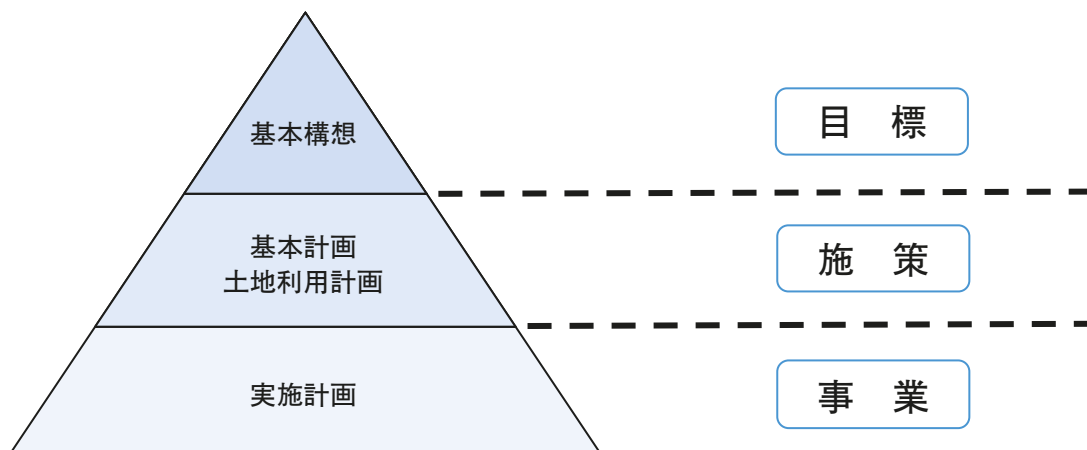
土地利用計画は、基本構想に掲げた将来像の実現に向け、社会・経済情勢や本市の土地利用の状況、国・県が策定した「国土利用計画」や県が策定した「土地利用基本計画」を踏まえ、適正な土地利用を図るための基本的な方針を定めるものです。原則として5か年の計画とし、社会・経済情勢の変化等に応じて内容の見直しを行います。

4 実施計画

実施計画は、基本計画に定めた基本的施策を効果的に実施するための具体的な事業を定めたもので、毎年度の予算編成の指針となります。社会情勢や経済環境などの変化に柔軟に対応するため、3か年の計画とし、毎年度見直しを行い実効性の確保に努めます。

◆総合計画の構成及び期間

◎構成



◎期間

年度	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025	2026	2027	2028
基本構想	10年									
基本計画	5年（前期基本計画）					5年（後期基本計画）				
土地利用計画	5年（前期土地利用計画）					5年（後期土地利用計画）				
実施計画	←→		←→			←→ (3年分を策定し、毎年度見直し)				

第2章 本市の姿

第1節 位置と自然

本市は、長野県の南部に位置し、首都圏及び中京圏からは、ほぼ等距離に位置しています。南東側は南アルプスを境に山梨県と静岡県に接し、西側は中央アルプスを境に木曽地域に接しています。市域面積は667.93km²で、松本市、長野市に次いで県内3番目に広く、東部に南アルプス国立公園、三峰川水系県立公園を、西部に中央アルプス国立公園を有し、南アルプスと中央アルプスの2つのアルプスがそびえています。この2つのアルプスに抱かれた中央部には伊那盆地が開け、天竜川が三峰川をはじめとする支流を合わせて南下し、天竜川に交わる形で扇状地等が形成されており、広大なパノラマ景観が展開しています。

また、本地域は、内陸性気候で日照時間も長く、夏期は冷涼、冬期は降雪の少ない住みよい環境にあり、地震や台風などの大きな災害が比較的少なく自然環境に恵まれています。

第2節 沿革と現況

2006年（平成18年）3月31日に旧伊那市、旧高遠町、旧長谷村が合併して、新「伊那市」が誕生しました。

旧伊那市は、1954年（昭和29年）4月1日に、伊那町・富県村・美篤村・手良村・東春近村・西箕輪村の1町5村の合併により発足し、1965年（昭和40年）4月1日に西春近村が合併しました。

旧高遠町は、1875年（明治8年）4月23日に長野県下で最も早く町制が敷かれた西高遠町、東高遠町が、1889年（明治22年）4月1日に合併して発足しました。その後、1956年（昭和31年）には長藤村・三義村と合併し、1958年（昭和33年）に藤沢村、1964年（昭和39年）に河南村とそれぞれ合併しました。

旧長谷村は、1959年（昭和34年）4月1日に美和村と伊那里村が合併し発足しました。

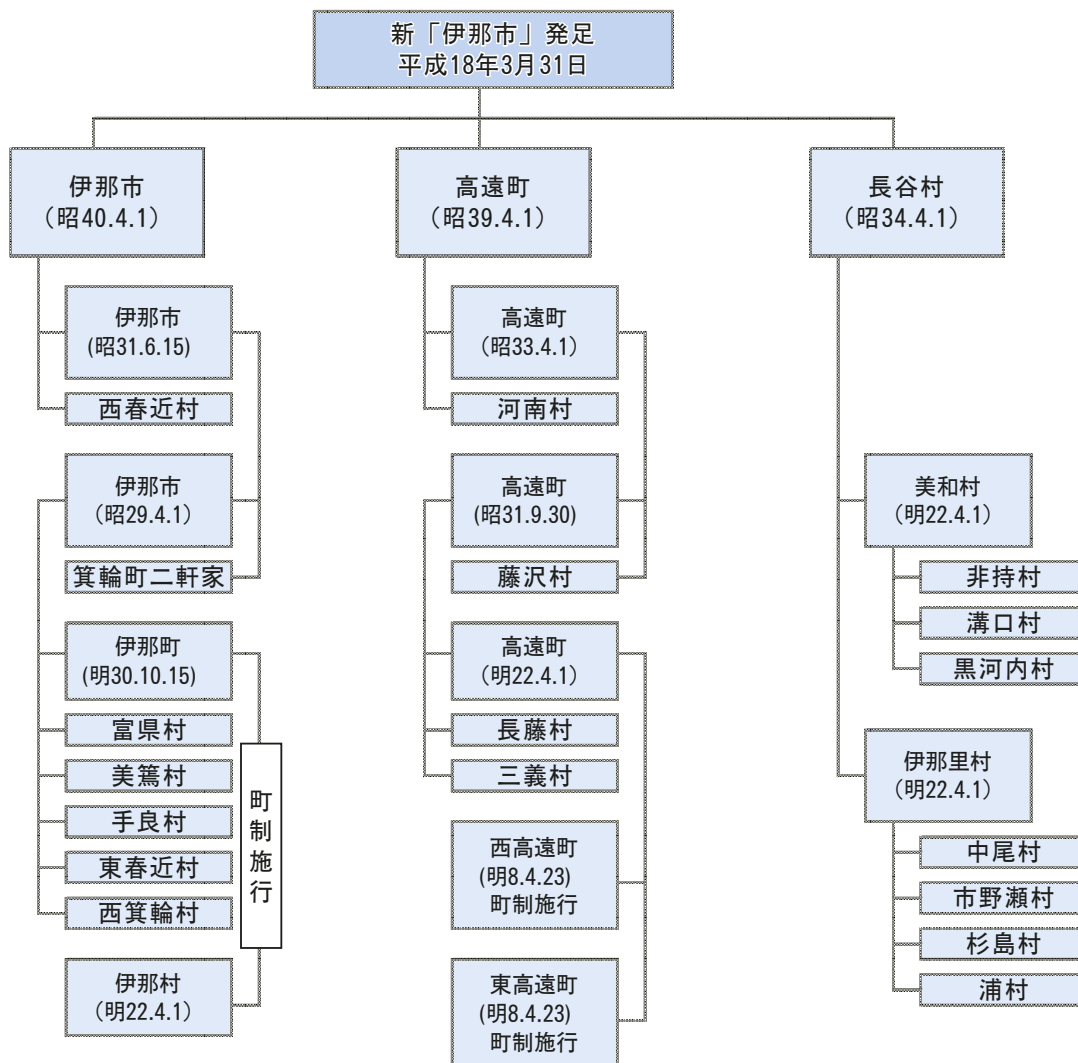
なお、新「伊那市」発足までの沿革は、別表1のとおりです。

新「伊那市」発足以後、本市では、「農林業・商工業の盛んな伊那市」、「旧城下で史跡とタカトオコヒガンザクラの高遠町」、「南アルプスの自然と豊かな民話伝承の長谷村」といった地域特性の融合により、魅力あるまちづくりを継承・展開しています。

南アルプス国立公園を中心とするユネスコエコパークや日本ジオパーク、「天下第一の桜」と称される高遠城址公園のタカトオコヒガンザクラ、「信州そば発祥の地」に由来する高遠そばなど、「山」「花」「食」という強みを生かした観光振興に力を入れるとともに、高度な生産加工技術産業、医療機器や食品などの健康長寿関連産業が発展し、「ものづくり産業」の拠点として複数の工業団地が形成され、伊那木曾連絡道路（権兵衛トンネル）やE19中央自動車道小黒川スマートインターチェンジの開通による商圈の広がりも見られます。

また、三遠南信自動車道の開通を見据えて、長野県南信地域と静岡県遠州地域、愛知県東三河地域の県境を越えた連携を図るための官民協働による三遠南信地域連携ビジョン推進会議（SENA）への加盟や、開業に向けた整備が進められているリニア中央新幹線の効果を伊那谷地域全体に波及させる取組など、広域連携においても重要な役割を担っています。

【別表1】新「伊那市」発足までの沿革



第3節 産業と文化

本市の農業は、産出額が約59.4億円（2021年（令和3年）：農林水産省市町村別農業産出額（推計））であり、恵まれた耕地を利用した米の栽培を中心に、野菜、花き、果樹の栽培や畜産が盛んに行われ、農畜産物の一大供給産地となっています。

林業は、近年の環境・エネルギーへの関心の高まりとともに、市域の8割以上を占める潤沢な森林資源を活用した薪やペレット等の木質バイオマスの普及など、地域産業の新たな基盤となることが期待されています。

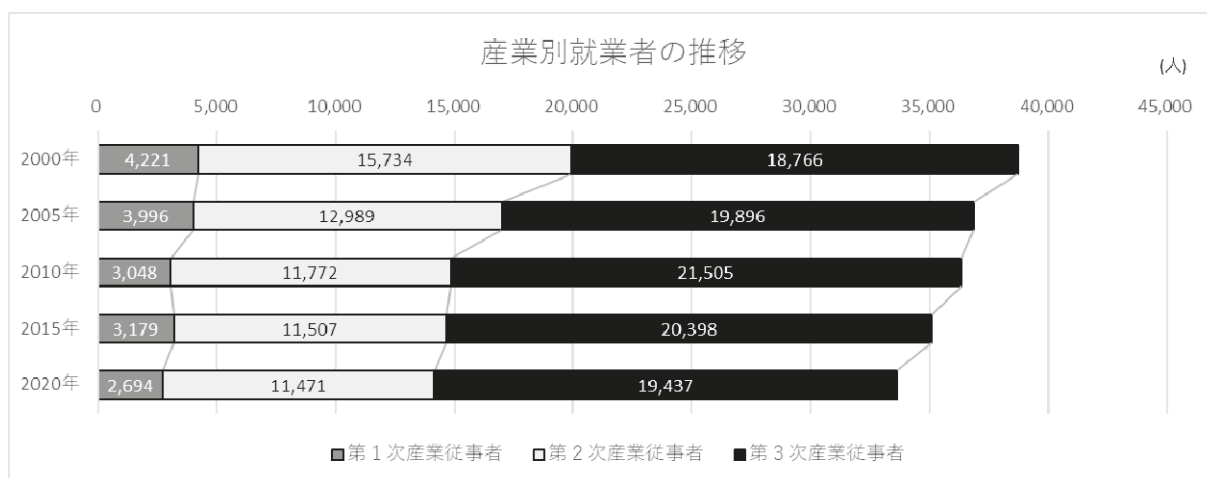
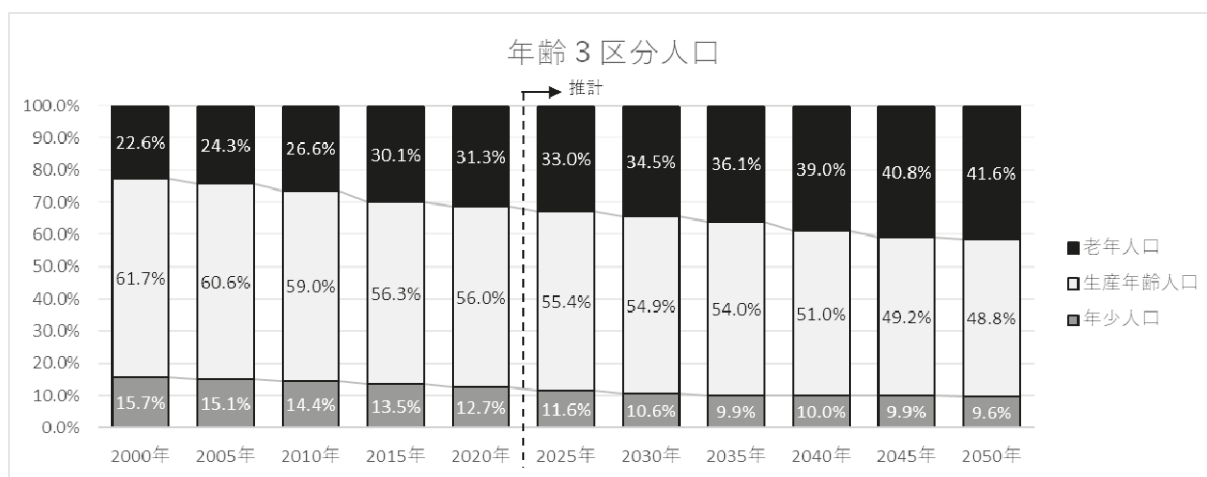
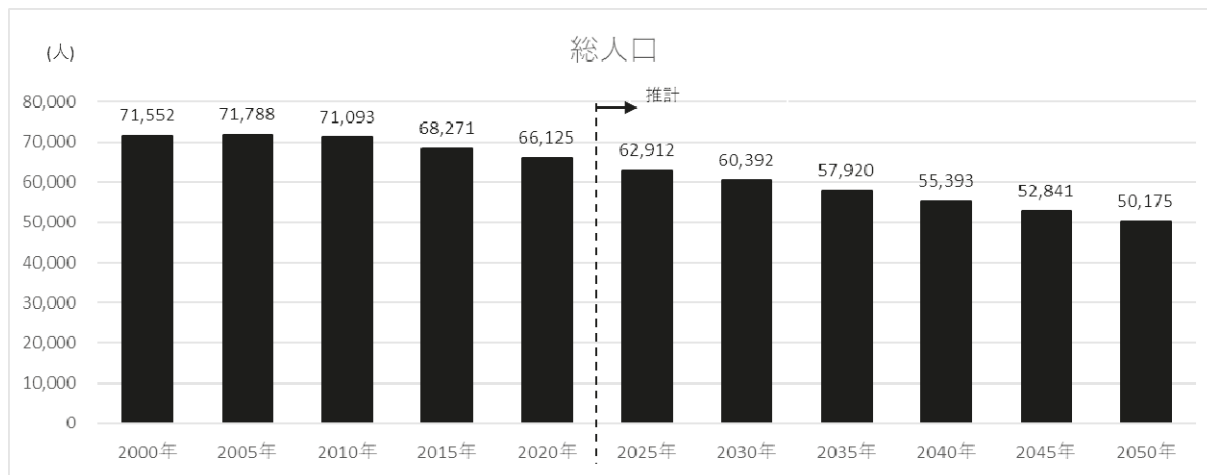
工業は、製造品出荷額が約1,873億円（2022年（令和4年）：経済構造実態調査）であり、特に機械、電子、食品などの生産拠点として、多様な産業が発展しています。

商業は、年間商品販売額が約1,334億円（2021年（令和3年）：経済センサス）であり、中心市街地の活性化などの課題を抱えてはいますが、常に南信地域の商圈の中心として高い集客力を維持しています。

文化面では、縄文時代の遺跡も多く出土しており、古代から恵み豊かで住みよい地域であったことが推測されます。

市内の文化財は多様で多岐にわたり、国・県市の指定（登録・選択を含む。）を受けているものは146件（2023年（令和5年）現在）に及びます。国指定史跡の高遠城跡をはじめ、指定有形文化財である顔面付釣手形土器などの考古資料や熱田神社などの歴史的建造物、県選択無形民俗文化財である「山寺のやきもち踊りの習俗」など地域に伝わる伝統文化に加え、市指定有形文化財である建福寺石仏群をはじめとする高遠石工などの石造物も地域の宝として今日まで市民により大切に引き継がれています。

第4節 主要指標



【資料：国勢調査、国立社会保障・人口問題研究所 地域別将来推計人口（令和5（2023）年推計）】

第3章 計画策定の背景

第1節 本市を取り巻く時代の潮流

1 持続可能な社会への取組

SDGsの達成に向けた取組が、世界各国において進められています。我が国においても、全閣僚を構成員とする「SDGs推進本部」の設置や全省庁の具体的な施策を盛り込んだ「SDGsアクションプラン」の発表を行い、SDGsの取組を加速させています。

また、地方においても、SDGsの理念に基づき、多様なステークホルダーと連携し、「誰一人取り残さない」持続可能なまちづくりを目指しています。

2 カーボンニュートラル実現への取組

地球温暖化により、地球の平均気温は、2020年（令和2年）時点で、工業化以前（1850～1900年）と比べ、約1.1℃上昇しており、今後も更なる上昇が予測されています。こうした気候変動により、豪雨や猛暑のリスクが更に高まることが懸念され、農林水産業、自然生態系、自然災害の増加、産業・経済活動等への影響が指摘されています。

そうしたなか、我が国においては2020年（令和2年）10月に、2050年までに温室効果ガスの排出を全体としてゼロにする、カーボンニュートラルを目指すことが宣言されました。次世代へ良好な環境を引き継いでいくため、環境にやさしいライフスタイルへの転換や、再生可能エネルギーの活用、省エネルギーの推進等、カーボンニュートラルの実現に向けた取組を推進していく必要があります。

また、カーボンニュートラルの実現のためには、再生可能エネルギーの主力電源化など、経済社会システムの変革、GX（グリーントランスフォーメーション）への取組が求められます。

3 人口減少及び少子高齢社会の急速な進行

日本の人口は、2015年（平成27年）以来、減少を続けており、国立社会保障・人口問題研究所の推計によると、減少スピードは、今後加速度的に高まり、2020年代始めの毎年60万人程度の減少が、2040年代頃には毎年80万人程度の減少にまで進行するとされています。

少子化においては、2022年（令和4年）の出生数が初めて80万人を割り込み、国の推計を大きく上回るペースで進んでいます。

高齢化では、2025年（令和7年）に団塊の世代が全て後期高齢者となり、3人に1人が65歳以上、5人に1人が75歳以上という超高齢社会を迎えることとなります。

こうした人口減少や少子高齢化の著しい進行は、年金・医療・介護をはじめとする社会保障費の増加など、経済や社会のあらゆる面への深刻な影響が想定されるとともに、生産年齢人口の減少による地域経済の縮小や税収の減少、地域コミュニティの担い手不足を生じることから緊急の対策が求められています。

4 健康寿命の延伸とウェルビーイングの実現

日本における平均寿命は、過去最高を更新し続けており、高齢者が生活の質（QOL）を維持しながら、心豊かな生活を送るためには、「健康寿命」を伸ばすことが重要となっています。

健康寿命の延伸を図る上で、食生活や運動習慣等を原因とする生活習慣病・メタボリックシンドローム（内臓脂肪症候群）は、大きな阻害要因となっています。高血圧や糖尿病をはじめとする生活習慣病は、脳血管疾患や心臓病、人工透析など重大な疾病の発症原因となったり、認知症や寝たきりなどの要介護状態にもつながる要因となっており、地域に合った取組が求められています。

また、少子高齢化、晩婚化、急速に発展する情報化社会、経済格差や雇用問題など複雑な現代社会において、こころの問題を抱える人が増加しているため、こころの健康づくりも大きな課題です。

こうした課題の解決を図り、心身ともに健康な状態を維持することで、誰もが自分らしく幸せに生きられる「ウェルビーイング」の実現が望まれています。

5 新型コロナウイルス感染症のもたらした影響

2019年（令和元年）12月に発生が確認され、全世界で爆発的な感染拡大を引き起こした新型コロナウイルス感染症は、多くの人の命と暮らしに脅威を与えただけでなく、生活スタイルや従来の価値観を大きく変えました。

新型コロナウイルス感染拡大に伴い、長期に亘って経済活動や社会活動の抑制を余儀なくされたことにより、これまでの生活とは異なる「新しい生活様式」への転換が行われてきました。こうした中、テレワークやオンライン会議などの新しい働き方が浸透しました。

このような社会の変化も考慮しながら、様々な分野でウィズコロナ・アフターコロナの時代に対応した施策を推進していく必要があります。

6 地方創生の推進による地方分散型社会への転換

2010年代後半から全国的に地方創生への取組が進展しており、地方自治体では、地域の特色や資源を生かした住民に身近な施策を幅広く推進し、安定した雇用の創出や新しい人の流れを生み出す移住・定住の促進、結婚・出産・子育ての支援等に取り組んでいます。そうした中、地方自治体の特徴ある魅力をより発揮するためには、特色ある施策と質の高い住民サービスを提供することが求められます。

こうした取組を持続的に実施するには、行財政改革や財政健全化の推進等による安定した行財政運営と、市民や団体、企業などとの協働による自立した活力ある地域づくりが必要となります。

また、ワーク・ライフ・バランスの実現に向けた働き方改革による就労意識の変化に加え、新型コロナウイルス感染症拡大を契機としたリモートワークの普及等により、若い世代の地方暮らしへの関心や東京一極集中の是正の機運が高まっており、都市集中型社会から地方分散型社会への転換が求められています。

7 DX（デジタルトランスフォーメーション）の進展

人口減少・少子高齢化の進行により、地方においては過疎化や地域産業の衰退、空き家の増加が大きな課題となっています。

さらに、新型コロナウイルス感染症の拡大が長期化したことに伴い、観光業をはじめとする地方経済を支える産業への打撃や、地域コミュニティの弱体化等、地方の経済・社会は大きな影響を受けました。

他方で、デジタル・オンラインの活用が進み、テレワークやワーケーションの普及により二地域居住・就労が現実のものになり、経済・社会の多極化が再認識されています。

このような大きな社会情勢の変化の中、国は地域の個性を生かしながらデジタルの力によって地方創生の取組を加速化・深化させていく必要があるとして、「デジタル田園都市国家構想」を掲げ、デジタル化の取組を進めています。

今後も誰一人取り残すことなく、地域で住み続けられるまちづくりのため、デジタル技術を活用した地域DX（デジタルトランスフォーメーション）を更に推進する必要があります。

8 価値観やニーズの多様化

社会の成熟に伴い、個人の価値観やライフスタイルが変化し、人々のニーズも多様化する中、より柔軟な行政サービスの提供が求められています。また、年齢、性別、国籍、文化、習慣、障害の有無、性的指向・性自認（性同一性）に関すること等に関わらず、個人として尊重され、それぞれが活躍できる環境づくりに対する意識が高まっています。

そのため、多様化する一人ひとりの生き方を尊重しながら、それぞれの個性や能力が生かされ、誰もが自分らしく生きられる社会を実現する必要があります。

9 流動化する国際情勢

2022年（令和4年）2月にロシアはウクライナへの侵攻を開始しました。このロシアのウクライナ侵攻により、ウクライナにおける深刻な経済縮小とロシア経済の混乱が引き起こされ、食料やエネルギー等の高騰や貿易、金融を通じた影響が世界経済へ波及し、我が国においても、エネルギー価格高騰、物価高騰が発生し、人々の生活に大きな影響をもたらしています。

加えて、新興国・途上国の急速な経済成長に伴い、国際情勢は一段と流動化しています。こうした状況において、世界情勢の影響を受けても耐えうるまちづくりに向けて、食料自給率の向上やエネルギーの地産地消に取り組んでいく必要があります。

10 頻発化・激甚化する自然災害

近年、豪雨災害の危険を及ぼす大雨の発生頻度が大幅に増加しており、それに伴う土砂災害の発生回数も増加傾向にあります。大雨による災害については、激甚化や広域化が懸念されており、単独市町村における取組だけではなく、水災害リスクに対して流域に関わるあらゆる関係者が協働して水災害対策を行う「流域治水」をはじめ、市町村を超えて連携した取組が必要です。

また、今後30年以内に70%から80%の確率で発生するとされている南海トラフ地震については、関東から九州・沖縄地方までの広い範囲に及ぶ甚大な被害が想定されるなど、自然災害の頻発化・激甚化の傾向が続くことが懸念されます。

災害から命を守るためには、日頃からの備えが重要であり、自らリスクを認識し行動する「自助」、周りの人たちと助け合う「共助」、行政などによる「公助」のバランスのとれた取組により、被害をできる限り最小限にする「減災」へつなげることが重要となっています。

11 広域交通の充実による行動圏の拡大と地域公共交通の維持

リニア中央新幹線の開業後は、首都圏や中京圏、関西圏との時間距離は大幅に短縮され、全国各地とのアクセス性も飛躍的に向上します。また、三遠南信自動車道についても、E19中央自動車道やE1A新東名高速道路と連結し、三遠南信地域の交流促進や発展に寄与する重要な道路として整備が進められており、大都市圏への物流や人流の大動脈として、広域観光や産業振興など幅広い分野で大きな効果をもたらすことが期待されています。

また、地方においては、高齢化の進行により、今後、運転免許証を自主返納する人が増加していくことが予想される一方、交通業界におけるドライバー不足が深刻化しており、自動運転サービスなどの新しい技術を活用した地域公共交通その他の移動支援の仕組みづくりに取り組む必要があります。

第2節 市民意識等から見える課題の整理

1 市民アンケート

(1) アンケートの概要

市政に対する評価や今後重視したい施策分野などを把握し、本計画策定に係る基礎資料とすることを目的として、2022年（令和4年）10月に「まちづくりに係る市民アンケート」を実施しました。

①市民アンケート

- ◆調査対象 伊那市に在住する16歳以上の男女計 2,000人
- ◆抽出方法 住民基本台帳からの無作為抽出
※2022年（令和4年）10月7日時点
- ◆回答率 38.2%（有効回答数 763人）

②中学生アンケート

- ◆調査対象 市内中学校2学年の生徒 618人
※2022年（令和4年）5月1日時点
- ◆回答率 19.9%（有効回答数 123人）

(2) アンケートの結果

各施策の満足度・重要性について

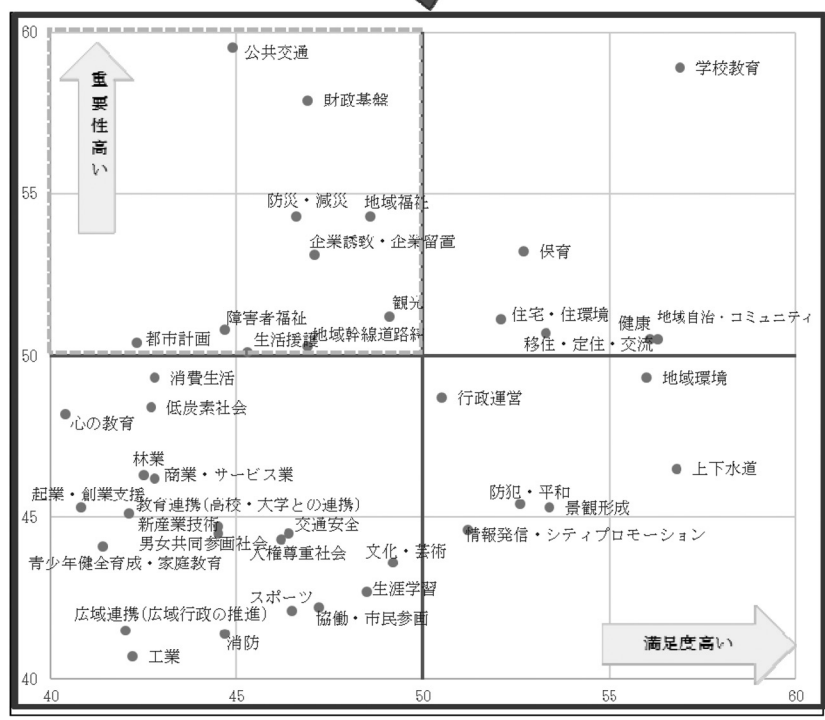
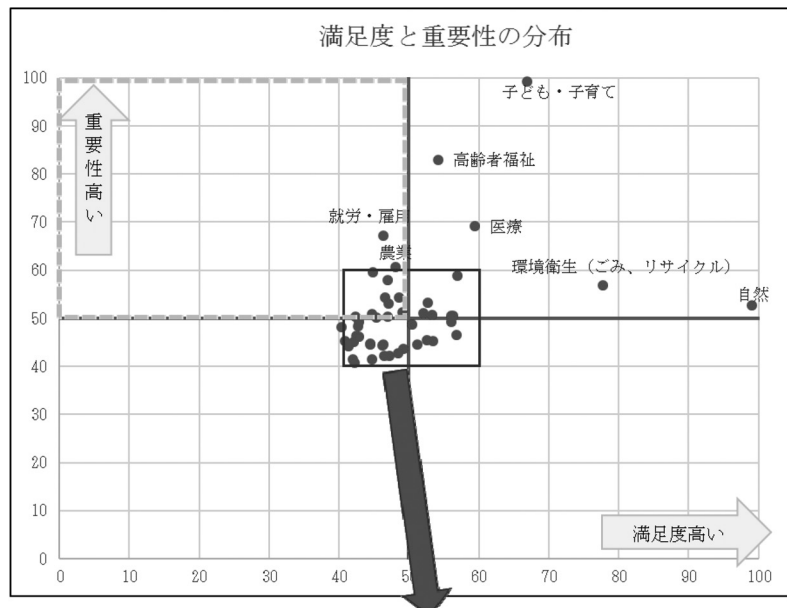
第2次伊那市総合計画の施策体系に基づき、全48項目についての現状の満足度と今後の重要性について順位付けし、満足度（横軸）と重要性（縦軸）の関係を分布図に表しました。

【現状の満足度】

		第1位	第2位	第3位
全体		自然	環境衛生 (ごみ、リサイクル)	子ども・子育て
年代別	10代	自然	学校教育	景観形成
	20代	自然	防犯・平和	景観形成
	30代	自然	子ども・子育て	保育
	40代	自然	環境衛生 (ごみ、リサイクル)	子ども・子育て
	50代	自然	環境衛生 (ごみ、リサイクル)	子ども・子育て
	60代	自然	環境衛生 (ごみ、リサイクル)	子ども・子育て
	70代	自然	環境衛生 (ごみ、リサイクル)	健康
80代	自然	環境衛生 (ごみ、リサイクル)	地域環境	

【今後の重要性】

		第1位	第2位	第3位
全体		子ども・子育て	高齢者福祉	医療
年代別	10代	学校教育	子ども・子育て	高齢者福祉
	20代	子ども・子育て	就労・雇用	保育
	30代	子ども・子育て	保育	学校教育
	40代	子ども・子育て	高齢者福祉	医療
	50代	高齢者福祉	子ども・子育て	就労・雇用
	60代	高齢者福祉	子ども・子育て	医療
	70代	高齢者福祉	子ども・子育て	農業
80代	高齢者福祉	医療	財政基盤	



【重要性が高く、満足度が低い施策】

- ◆就労・雇用
- ◆農業
- ◆公共交通
- ◆財政基盤
- ◆防災・減災
- ◆地域福祉
- ◆企業誘致・企業留置
- ◆観光
- ◆障害者福祉
- ◆地域幹線道路網
- ◆都市計画
- ◆生活援護

こうしたまちづくりの方向性を踏まえつつ、市民が「重要性が高い」と考えているにもかかわらず、「満足度が低い」と評価している施策について、今後優先的に取り組んでいく必要があります。

2 市民ワークショップ

(1) ワークショップの概要

市の課題や目指すべき将来像、地域の特性を明らかにし、市民の意見をまちづくりへ反映することを目的として、2023年（令和5年）5月に「まちづくり市民ワークショップ」を開催しました。

- ◆開催日時 令和5年5月28日（日）
- ◆会場 伊那市役所 多目的ホール
- ◆参加人数 29名
- ◆全体テーマ
住んでみたいまち『いなし』ってどんなまち？
～みんなで考える20年後の伊那市～

(2) ワークショップの結果

20年後の伊那市で「増えてほしいもの、減ってほしいもの、変わらずにあってほしいもの」をテーマに4グループに分かれてグループワークを行いました。

各グループの結果は、次のとおりです。

【グループごとに願う未来の形「○○○な伊那市」】

- 「田舎都市 いなし」
…にぎわいと都会のエッセンスのある豊かな田舎。仕事＝生きがい、基盤である。
- 「チャンスがある伊那市」
…誰でもチャレンジ&チェンジできる環境が重要。まちは人でできている。
- 「みんなでつくりあげる伊那市」
…いろんな意見が出てまとまらない。考え方と価値観のアップデートが必要。
- 「明日への不安がない伊那市」
…選択肢が多様であってほしい。格差で将来が左右されないでほしい。対話が大事である。

グラフィックレコーディングによる記録

※グラフィックレコーディング…イラストや図形等を用いることで議論を可視化して整理する手法。



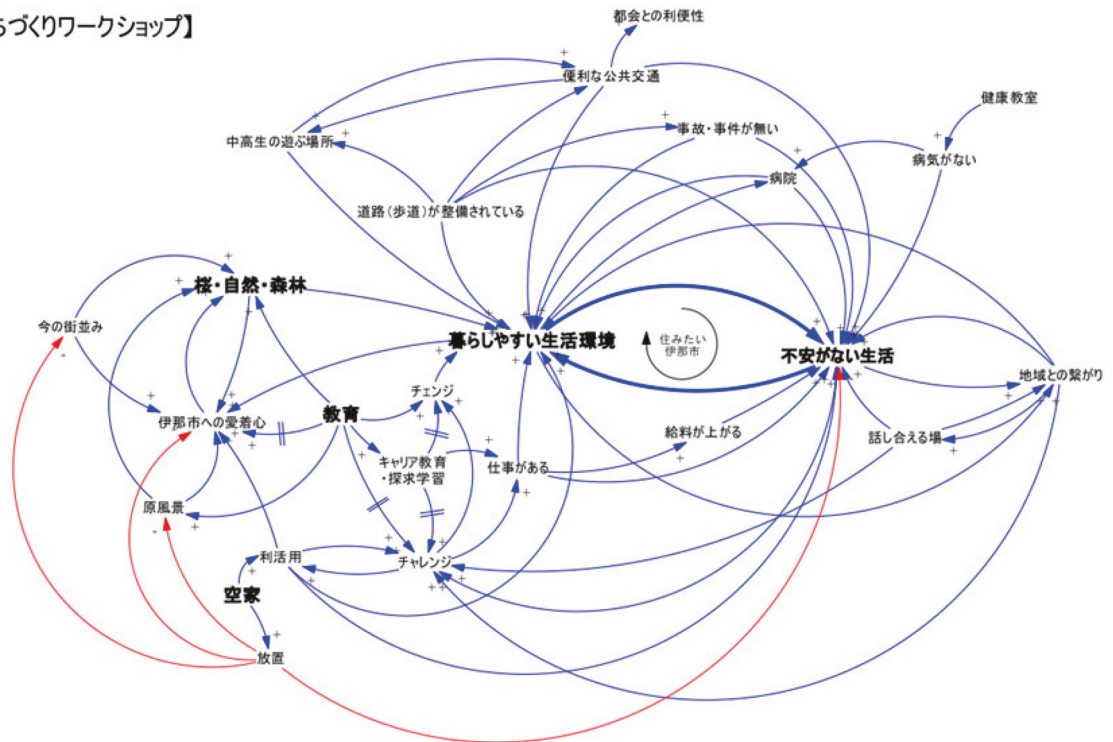
2 ループ図による分析

※ループ図…主要な要素及びそれらに影響を与える要素、影響を受ける要素を列挙し、要素間の因果関係を矢印で結びながら、要素間の相互作用の構造を図式化するためのツール。

グループワークで出された意見を基に、ループ図を用いて各要素に生じる相互作用を整理しました。

青色 (+) の矢印は別の要素に良い方向に作用し、赤色 (-) の矢印は悪い方向に作用していることを表しています。また、矢印上の「=」は遅れて現れる影響を示しています。

【まちづくりワークショップ】



これらの結果より、ワークショップの中でキーワードとして挙げられた、「雇用（仕事）の確保」、「交通インフラの整備」、「地域コミュニティの維持」、「教育の充実」、「豊かな自然環境や景観の保全」等への施策の推進を図り、あらゆる年代の人が住みたい、住みやすいと思うまちづくりを進める必要があります。

第3節 第2次伊那市総合計画前期計画の評価と検証

1 前期基本計画の数値目標と実績値

計画期間を 2019 年度（令和元年度）から 2023 年度（令和 5 年度）とする第 2 次伊那市総合計画前期計画においてまちづくり指標（K P I）を設定し、施策の進行管理を行っています。

最終目標値に対する 2021 年度（令和 3 年度）実績における達成状況は以下のとおりです。

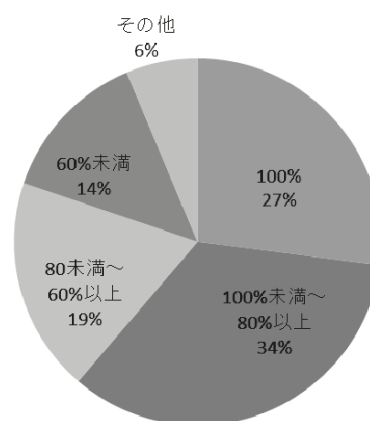
2021 年度（令和 3 年度）実績において最終目標を達成している指標は、全体の 27%でした。また、全体の 8 割の指標は達成率 60%以上であり、計画期間の 3/5（60%）が経過した時点での達成率であることを鑑みると、概ね良好に推移している状況でした。

一方で、達成率が低調であった施策の原因分析を行ったところ、施設入場者数やイベント参加人数など、新型コロナウイルス感染拡大の影響によるものが多く見受けられました。

〈達成率区分ごとの指標数〉

■令和 3 年度の総括 達成率	R3 実績	
	指標数	構成比
100%	30	27%
80%以上 100%未満	38	34%
60%以上 80%未満	21	19%
60%未満	15	14%
その他	7	6%
合計	111	100%

最終目標値達成状況 (令和3年度実績)



※「その他」には、実績値がない指標（5年に1度の調査等）などが含まれる。

〈基本目標ごとの達成率 60%以上の指標の割合〉（R3の実績がないものは除く）

基本目標	件数	割合	基本目標	件数	割合
1 地域の未来を協創する協働のまちづくり	7/8	88%	4 地域の個性と魅力が輝くにぎわいと活力のあるまちづくり	24/28	86%
2 自然と調和した環境にやさしいまちづくり	5/5	100%	5 歴史と文化を未来へつなぐ、心豊かな人を育むまちづくり	10/17	59%
3 子育てを支え、だれもが健康で安心して暮らせるまちづくり	24/26	92%	6 生活基盤の充実した安全で快適に暮らせるまちづくり	19/20	95%

2 内部評価

後期計画の策定において、内部組織である総合計画策定委員会及び総合計画策定専門委員会による前期基本計画の内部評価を実施しています。

集計結果は以下のとおりです。

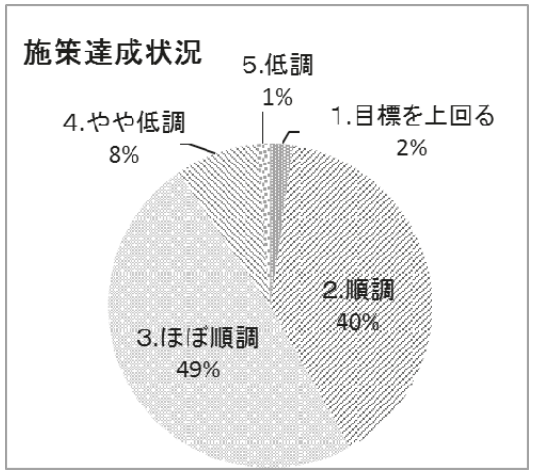
達成度が順調であった施策（目標を上回る、順調、ほぼ順調）の数は全体の 91%であり、達成度が低調な施策（やや低調、低調）の数は、9%でした。

また、達成度の全体平均は 67%であり、前期計画に基づいた施策は概ね良好に推進されました。

※計画期間全体における 2/3（42 月/60 月）経過時に評価実施

〈達成度区分ごとの施策数〉

達成度	施策数	構成比
1 目標を上回る	5	2%
2 順調	87	40%
3 ほぼ順調	107	49%
4 やや低調	18	8%
5 低調	3	1%
合計	220	100%



〈施策達成度平均〉

(目標を上回る⇒100%、順調⇒80%、ほぼ順調⇒60%、やや低調⇒40%、低調⇒20%で計算)

基本目標	施策数	達成度平均	基本目標	施策数	達成度平均
1 地域の未来を協創する協働のまちづくり	15	67%	5 歴史と文化を未来へつなぐ、心豊かな人を育むまちづくり	28	69%
2 自然と調和した環境にやさしいまちづくり	14	71%	6 生活基盤の充実した安全で快適に暮らせるまちづくり	38	63%
3 子育てを支え、だれもが健康で安心して暮らせるまちづくり	47	67%	土地利用計画	23	73%
4 地域の個性と魅力が輝くにぎわいと活力のあるまちづくり	57	63%	全体	220	67%

はじめに 用語解説

●【ユネスコエコパーク】

生態系の保全と持続可能な利活用の調和を目的としてユネスコが開始したもの。地域の豊かな生態系、生物系、生物多様性の保全を行い、自然に学び、同時に文化的にも経済的にも社会的にも持続可能な発展を目指す取組。南アルプスユネスコエコパークは2014年6月正式登録。

●【日本ジオパーク】

地球、大地を意味する「ジオ」と公園を意味する「パーク」を組み合わせた造語。ジオ（地球）を学び楽しむことのできる場所。2023年5月24日現在、日本には46地域の日本ジオパークが日本ジオパーク委員会によって認定されており、その内10地域がユネスコ世界ジオパークとしても認定されている。

●【スマートインターチェンジ】

日本の高速道路の本線上またはサービスエリア、パーキングエリアなどに設置されているETC専用の簡易構造のインターチェンジ。

●【木質バイオマス】

バイオマスは生物資源（bio）の量（mass）を現わす言葉であり、「再生可能な、生物由来の有機性資源（化石燃料は除く）」を呼ぶ。その中で木材からなるバイオマスを木質バイオマスと呼び、主に、樹木の伐採や造材の時に発生した枝、葉などの林地残材、製材工場などから発生する樹皮や鋸屑などのほか、住宅の解体材や街路樹の剪定枝などの種類がある。

●【SDGs】

Sustainable(サステナブル) Development(デベロップメント) Goals(ゴールズ)＝「持続可能な開発目標」の略で、持続可能な世界を実現するための国際社会共通の目標として、2015年の国連サミットで採択された。2030年を達成年限として、17のゴール（目標）と169のターゲットから構成されており、地球上の「誰一人として取り残さない」社会の実現の向け、経済、社会、環境などの広範な課題に対する総合的な取組が示されている。

●【ステークホルダー】

利害関係者。利害と行動に直接・間接的な利害関係を有する者。

●【カーボンニュートラル】

二酸化炭素をはじめとする温室効果ガスの「排出量」から植林、森林管理などによる「吸収量」を差し引いて、合計を実質的にゼロにする。

●【GX（グリーン・トランスフォーメーション）】

温室効果ガスを発生させる化石燃料から太陽光発電、風力発電などのクリーンエネルギー中心へと転換し、経済社会システム全体を変革しようとする取組。

●【ウェルビーイング】

Well（良い）とbeing（状態）が組み合わさった言葉。幸福で肉体的、精神的、社会的すべてにおいて満たされた状態。

●【QOL】

Quality Of Lifeの略で、「生活の質」、「人生の質」などと訳され、充実した人生を過ごすことや、自分らしさを保って暮らすことなどに関する指標の一つ。

●【メタボリックシンドローム（内臓脂肪症候群）】

内臓肥満に高血圧・高血糖・脂質代謝異常が組み合わさるこ

とにより、心臓病や脳卒中などになりやすい病態。

●【新しい生活様式】

新型コロナウイルス感染症の感染拡大を防止するために厚生労働省が公表した行動指針。

●【テレワーク】

Tele（離れて）とWork（仕事）を組み合わせた造語。情報通信技術を活用した時間や場所を有効に活用できる柔軟な働き方。自宅で働く「在宅勤務」、本拠地以外の施設で働く「サテライトオフィス勤務」、移動中や先で働く「モバイル勤務」がある。

●【オンライン会議】

インターネット環境とパソコンやスマートフォンといったデバイスを利用して遠隔地の拠点とつなぎ、両者がリアルタイムで会議や打ち合わせなどを行える仕組み。

●【ウィズコロナ】

Withコロナ。新型コロナウイルスとの共存・共生という意味で使われ、新型コロナウイルスが撲滅困難であることを前提とした新たな戦略や生活様式のこと。

●【アフターコロナ】

Afterコロナ。新型コロナウイルス感染症が終息した後の世界を指す。コロナ禍以前の状態に戻るのではなく、新型コロナウイルスの感染拡大によってもたらされた変革後の新しい社会。

●【ワーク・ライフ・バランス】

労働者それぞれが充実した生涯を送れるよう、仕事と生活を調和させるという考え方。

●【リモートワーク】

Remote（遠隔）とWork（働く）を組み合わせた造語であり、オフィスから離れた遠隔地で働く勤務形態。

●【DX（デジタルトランスフォーメーション）】

ビッグデータなどのデータとAI、IoTをはじめとするデジタル技術を用いた変革・改革。

●【ワーケーション】

Work（仕事）とVacation（休暇）を組み合わせた造語。テレワーク等を活用し、リゾート地や地方部など普段の職場とは異なる場所で働きながら休暇取得を行うこと。あるいは休暇と併用し、旅先で業務を組み合わせる滞在のこと。仕事主体と休暇主体の2つの概念が存在する。

●【デジタル田園都市国家構想】

岸田文雄内閣により発表された構想であり、地域の豊かさをそのままに、都市と同じ又は違った利便性と魅力を備えた、魅力溢れる新たな地域づくりを目指した構想。具体的には、「暮らし」や「産業」などの領域で、デジタルの力で新たなサービスや共助のビジネスモデルを生み出しながら、デジタルの恩恵を地域に届けていくことを目指す。

●【ジェンダー平等】

一人ひとりの人間が、性別にかかわらず、平等に責任や権利や機会を分かちあい、あらゆる物事を一緒に決めることができること。

●【流域治水】

気候変動の影響による水災害の激甚化・頻発化等を踏まえ、堤防の整備、ダムの建設・再生などの対策をより一層加速するとともに、集水域（雨水が河川に流入する地域）から氾濫域（河川等の氾濫により浸水が想定される地域）にわたる流域に関わるあらゆる関係者が協働して水災害対策を行う考え方

